

## 海外林業研究会々員の広場

### 嫌われても国際協力（10） 雑文とは雑な文章ではない！

本連載「嫌われても国際協力」だけでなく熱帯林業に掲載される報文はすべて、研究者の社会では「雑文」と呼ばれる。研究業績としてカウントされない「その他の文章」という意味で、「雑な」文という意味ではない。雑文に対比されるのが、査読つきの学術雑誌に掲載された「論文」である。投稿された原稿の内容を第三者の専門家が審査して、内容の修正を求めたり、掲載の可否に関する判断がなされたのち公表されるものである。自然科学の世界では、同じ「論文」でも、日本語で書かれたものよりも、英語で書かれたものの方が、評価が高い傾向がある。学術雑誌にもさまざまなランクがあるが、本稿の主題とは直接関係しないので、とりあえずおいておく。要するに、熱帯林業のような刊行物に報文が掲載されても、研究業績としてカウントされないということである。ここからが本題である。

論文として公表する前のデータを使った原稿を熱帯林業にだしてきた若手研究者に、ある人が言った。「あのなあ、雑文は論文にしたあとの出がらしでいいんや。」私はすかさず言った。「出がらしじゃなくて、エッセンスや。しかも研究者じゃない人、専門外の人にも内容がわかるように工夫せなあかん。」

文章を書くのは、何かを誰かに伝えるためである。「何か」と「誰か」は、そのときどきが変わる。自分の経験上、「何を」と「誰に」がはっきりしないのに、文章を書こうとしても、ろくなことにならない。「何を」と「誰に」がはっきりするまでは、文章など書かない方が良いのである。では、この文章は「何」を「誰」に伝えようとしているのか。「まずは学術雑誌に、英語論文を書きなさい。」ということ、熱帯をフィールドにする若者に伝えたいのである。外国で研究させて頂いたのだから、研究成果は国際的に通用する学術論文として公表するのが礼儀である。その一方、熱帯林に関する正しい情報を、日本の人に伝えることも必要である。研究者社会の「雑文」とは、専門の学術雑誌に論文として発表した内容を、研究者以外の人にもわかりやすく伝えるためのものなので、そのための工夫が必要になる。そして若者の報文に共著者として名を連ねる方々には、そういう指導をして欲しいと伝えたいのである。こんな偉そうなことを書くと、嫌われるかも知れないけれど、若手研究者の能力向上、研究成果の普及の両方に役立つことなので、国際協力である。（藤間 剛）